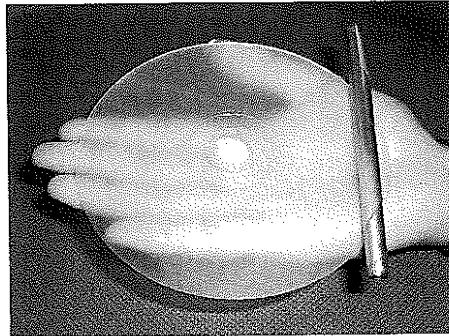
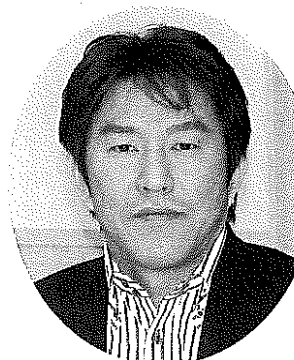


“データ消却とリサイクルを同時に実現” CDの大量処理ビジネスを本格化

キャラバン堂



表面をキレイに削ったCD。棒状の印刷面は燃料に活用



富田佳和 社長

塩ビ管などプラスチック製品再生加工の(株)キャラバン堂(藤枝市天王町3-9-42、富田佳和社長)は、昨年からはじめたCDメディアのデータ消却とリサイクルを同時に行う新事業を今年から本格展開する。

出版社やレンタル業者、音楽メディアやIT業界など、さまざまな分野で広く利用されているCD。その本体はレーベル(印刷)面とアルミの反射層、記録層、それとポリカーボネート基盤の4層で構成されている。このCDを、独自に開発した機械を使ってレーベル面を削るよう処理することで、データの消却を行いつつ、プラスチック原料を再生するというのが、同社のビジネスだ。

ポリカーボネートは廃プラスチックの中でも高価なことから、市場価値が低くなったり不要になったCDは、これまで

で業者が集めて海外に持っていく、薬品で表面を溶解処理して再生原料に加工していた。しかし溶解後の廃液が環境破壊の原因として近年問題視されるようになってきたことから、新たな方法が模索されていた。また昨今は個人情報保護などの観点から、データ除去のニーズが高まっており、廃棄CDの穴あけや破壊、粉碎するサービスを行う業者も増えている。「ただこれらの方法では、データは消去できても印刷シートなどの不純物が含まれているので、そのままでは再生原料にはなじみません。そこからレーベル面を削り取ったかどうかという発想が生まれました」(富田社長)。

加工機は木工機械メーカーと共同開発した。プラスチック素材の異物を除去するように削り取るため、樹脂の純度も高まり、原料としての価値も高まるという。処理時間は1秒間に2枚。削り取ったレーベル面はボイラー用の固形燃料に活用する。CDは情報資産でも

あることから、個人情報の保護や著作権問題など発注者側の不安に対応するため、今年中には日本情報処理開発協会が認定している「プライバシーマーク」を取得する予定だ。

昨年1月には「CDメディアのデータ消去事業への進出」として、県から経営革新計画の承認も受けている。データ消去サービスは、送料を負担してくれる基本的には無料。処理後の素材は発注者に返却しているが、買い取りも行う。富田社長は「これまでなかなかリサイクルが難しかったCDを、なんとか環境に負

荷をかけることなく再生できる仕組みを作った。今後はISOやエコアクションの審査機関にも働きかけて、広く普及させていきたい」と意欲を見せている。

同社は、産廃処理やプラスチックリサイクルなどを手がける(株)キャラバン(本社同、富田社長)の関連会社で2004年に設立された。収集した廃プラスチックの中にCD盤が大量に含まれていることから、環境への負荷や処理コストの低減につながるビジネスモデルを検討していた。

問い合わせ、054-645-2045